

聖書：第二サムエル記2章18～32節

説教：神は生きておられる

1 ダビデ派とサウル派の戦い

イスラエルの初代の王であったサウルが戦場に倒れました。ダビデが次の王となることは、神の計画です。今日の箇所では、その王座を巡ってサウルの家と、ダビデの家との間に激しい争いが起きたことが記されています。

今日初めてここを読む方は、登場人物がどんな関係にあるのか、わかりにくいと思いますので、最初に簡単に整理しておきます。今、サウル派とダビデ派の二つのグループが衝突しております。サウル派の将軍がアブネルです。一方、ダビデ派の将軍がヨアブ。そのヨアブにはふたりの弟がいます。真ん中がアビシャイ。末の弟がアサエルです。

そのアサエルはすばらしく足が速い人で、逃げるアブネルを単独で追いかけます。アブネルは後ろをふり向き、アサエルと次のようなやりとりをします。20～21節。「アブネルは振り向いて言った。「おまえはアサエルか。」彼は答えた。「そうだ。」アブネルは彼に言った。「右か左にそれて、若者のひとりをつらえ、そのものからはぎ取れ。」しかしアサエルは、アブネルを追うのをやめず、ほかへ行こうとしなかった。」

アブネルは、自分が助かりたくてこのようなことを言っているように思うかもしれませんが、そうではありません。このあとすぐにわかるように戦いの腕にかけては比べものにならないくらいアブネルが強い。アサエルを殺そうと思えばすぐにできます。でも、

そうしようとしません。アサエルを殺したくはないのです。その理由が22節にあります。

「アブネルはもう一度アサエルに言った。「私を追うのをやめて、ほかへ行け。何でおまえを地に打ち倒すことができよう。どうしておまえの兄弟ヨアブに顔向けができよう。」

このように、アブネルは二度にわたって警告します。しかし、事態は最悪の結果となりました。警告を無視したアサエルは槍で倒されてしまいます。

まもなくして、ヨアブとアビシャイが現場に駆けつけます。そのとき、このふたりが何を思ったのか、皆さんは想像できるはず。末の弟を殺したアブネルに対し激しい怒りで一杯です。復讐の炎を燃やしながらヨアブとアビシャイは、アブネルのあとを追っていきます。

2 停戦協議

1) アブネルの苦しみ

いっぽう、アブネルは多くの兵士を失い、近くには数人の兵士がいるだけです。ここでヨアブたちに追いつかれたら勝ち目はありません。もうすぐ追いつかれるというとき、目の前にベニヤミン人の軍隊が丘の上に集まっているのが見えてきました。サウルはベニヤミン出身でしたから、サウルの家にもっとも忠実に仕える人たちです。アブネルはそのキャンプのなかに逃げ込み、危機一髪助かります。ここで形勢は一気に逆転です。アブ

ネルが一声発すれば、ダビデの家をつぶすことができる絶好のチャンスを手に入れました。

ところが、アブネルは何をしたか。26節。「アブネルはヨアブに呼びかけて言った。「いつまでも剣が人を滅ぼしてよいものか。その果ては、ひどいことになるのを知らないのか。いつになったら、兵士たちに、自分の兄弟たちを追うのをやめて帰れ、と命じるつもりか。」

ひとことで言えば、お互いここで兵を引いて停戦協定を結ぼうではないかとの提案です。またとない絶好のチャンスをわざわざどぶに捨てたようなものです。アブネルは何を考えているのでしょうか。

ダビデがまだサウル軍の司令官に就いていた頃のことですが、アブネルとヨアブはともにダビデのもとで訓練を受けていたのではないかと推測されます。もしそうであれば同じ釜の飯を食った仲間です。今はお互いに敵どうしに分かれてしまいましたが、できるなら戦いたくない。それが本心です。でも、一途なアサエルは、アブネルの警告を聞こうとはしない。それでやむを得ず、殺してしまいました。

アブネルは言いました。「どうしておまえの兄弟ヨアブに顔向けができよう。」どんな事情であれアサエルを殺したことを、ヨアブに申し訳ないと思っています。済まないことをしたと感じています。

戦いにかけては、右に出る者がいないほどのすぐれた能力があったアブネル。そのことを誇ってきた人生でした。でも、その力があつたために、かえって親しい友人の兄弟を殺すはめになり、取り返しのつかない悲しみを引き起こしてしまったのです。「その果ては、ひどいことになるのを知らないのか。」

これ以上、ひどいことが繰り返されてはならない。こんな経験は自分だけで終わりにしたい。アブネルは、手に持った剣をおろして、停戦の申し出をしました。

2) ヨアブの応答

ヨアブは、アブネルのことばをどう聞いたのでしょうか。喜んでアブネルの提案を受け入れたかのように見えます。でもどうですか。弟が目の前の相手に殺され、無残な姿で横たわっているのを見たのです。弟を殺した相手と喜んで停戦協定を結ぶでしょうか。そんなはずはありません。ヨアブの復讐心は、燃えさかったままです。実際このあと、彼はダビデに隠れてアブネルを殺してしまいます。そのことで、ダビデは大きな苦しみを味わうようなことにさえなってしまうのです。

それなのに、どうしてヨアブは停戦の提案を受け入れ、兵を引いたのか。理由は簡単です。ここでベニヤミン人を相手に戦っても勝ち目がないからです。「神は生きておられる。もし、おまえが言いださなかったなら、確かに兵士たちは、あしたの朝まで、自分の兄弟を追うのをやめなかつただろう。」

「神は生きておられる。」アブネルに心から同意したわけではありません。今のことばで言い直せば、「自分は何とラッキーだろうか。これこそ神の助けだ。」それくらいの意味で語ったと思ったほうが良いでしょう。

もしアブネルが提案しなかったならヨアブは死んでいました。アブネルのことばで救われたのです。でも、彼は何も感謝しません。かえって、アブネルに復讐することだけを考え続けます。ヨアブの姿を通して、人の罪がどれほどひどいものであるかが明らかにされていきます。

3 罪の中に生きておられる神

1) 人と人が争い続ける現実

ここに書かれているのは、決してどこか遠くの世界の話ではありません。私たちが置かれた現実をそのまま映し出しているように感じます。

新聞を読んでいたら、こんな記事が載っていました。自分は東京に住んでいて、親が地方に住んでいる方の話でした。親が認知症にかかり、介護のために何時間もかけて親の所に通ったそうです。けれどもどうしても距離がある訳ですから、頻繁にとはいかない。それで地域の人から「どうしてあなたはもっと親の面倒を見ないのか」と言われてしまい、それ以来、顔を隠しながら実家に戻らなければならなかったそうです。近所の人たちの視線がまるで剣のように感じられ、苦しんでいます。近所の人たちだけではありません。親戚の間で、肉親の間で、兄弟どうして、親子で、あるいは会社の中でまるで剣をふりかざすようにして争いあう、そんな現実に行きつづけている方も多くはいます。

ある方からお話を伺ったことなのですが、親が健在なときは、いとこや親戚が仲良くしていたのに、親が亡くなった途端にまったく寄りつかなくなった。それ以来、人を信用できなくなった、とその方は嘆いておられました。おそらく、お金のことがからんでいるのだろうと言うのです。

私たちは、相手と和解すべきであることは聖書から教えられています。けれどもそれが非常にむずかしいということも、多くの方が経験しています。理不尽なことを言ってきたり、したりする人をどうやって赦せと言うのか。あの人と和解することなど、想像もでき

ません。「ごめんなさい」と言いたくありません。それどころか、顔も見たくないし、声も聞きたくない。それが多くの方の本音です。

2) 和解を拒否され、十字架に追いやられたイエス

神はどうされるのでしょうか。イスラエルの中でサウルの家とダビデの家が、王座を巡って兄弟どうしが憎しみあい、殺し合う現実がありました。神は、こんなことがいつまでも続いて良いとは思っていません。神は、心を痛められます。アブネルを通して、神の御旨が明らかにされます。「いつまでも剣が人を滅ぼしてよいものか。その果ては、ひどいことになるのを知らないのか。いつになったら、兵士たちに、自分の兄弟たちを追うのをやめて帰れ、と命じるつもりか。」

アブネルは敵であるヨアブを剣で殺すことはやめて、ヨアブを救おうと考えます。でも、ヨアブはアブネルを心から赦しません。その結果、アブネルは殺されてしまいます。「あのとき、アブネルが情け心を起こさず、ヨアブを殺しておけばよかったのに。馬鹿なのはアブネルだった」、ということでしょうか。

いいえ。イエス・キリストも同じ道を歩まれたことを思い起こします。主は、私たちに和解を申し出てくださり、私たちの罪を私たちが悔い改める前に先に赦してくださいました。にもかかわらず、私たちはこの方を十字架に追いやり、和解の申し出を拒み、殺してしまいました。主がされたことは無駄に見えます。愚かな歩みにしか見えません。でも、これが神の御心でした。いったい、どんな意味があるのでしょうか。

私は皆さんに、「人を赦しなさい」、と言う

ことはできません。そもそも自分自身が、まだ赦せないで苦しんでいるからです。その代わりに、こんなことは言えるでしょう。もし、私たちが誰かを絶対に赦すことができないと苦しんでいるのなら、思い出していただきたい。主は、私たちの「赦せない」という思いを拒むことはなさいません。かえってそのまま、私たちの「赦せない」という思いを引き受けてくださり、十字架に向かってくださったことをです。

ヨアブは言いました。「神は生きておられる。」二つの意味があります。一つは先ほども言ったように、「ラッキー、これで助かった。」そのような意味。そして二つ目の意味。神は、確かに私たちが抱え込んでいる罪と争いのまっただ中で生きておられる。そのような意味です。

苦しみをともにしてくださる主を見上げて歩んでまいります。